

サイコパシーが向社会的行動と身体的攻撃に与える影響 ——情動的・認知的共感性による媒介効果

田 村 紋 女

広島大学
日本学術振興会

杉 浦 義 典

広島大学

サイコパシーは向社会的行動の低さや攻撃性の高さと関連する。共感性の欠如は一次性サイコパシーの特徴である。共感性は向社会的行動と攻撃性の双方を予測する要因として知られており、情動的共感性と認知的共感性にわけられる。しかし、サイコパシーと向社会的行動、攻撃性の関連に対して、共感性の下位次元が特異的に与える影響は不明確である。本研究では、一次性サイコパシーと向社会的行動の関連を情動的共感性が媒介し、一次性サイコパシーと身体的攻撃の関連を認知的共感性が媒介することを検討した。大学生132名が、サイコパシー、共感性、向社会的行動、攻撃性の指標で構成される質問紙に回答した。その結果、予想された媒介効果は双方とも有意であり、一次性サイコパシーの向社会的行動と身体的攻撃は共感性の異なる側面によって媒介されることが示された。本研究の結果は、サイコパシーの向社会性や反社会性のメカニズムの解明に寄与するだろう。

キーワード：サイコパシー、情動的共感性、認知的共感性、向社会的行動、攻撃性

問題と目的

他者との良好な対人関係を形成するためには、他者を援助することと他者に危害を加えないことの双方が重要である。向社会的行動や攻撃性は、このような他者に対する態度や行動を反映する代表的な指標である。向社会的行動は他者への利益や援助を目的とする自発的な行動である (Eisenberg, Eggum, & Giunta, 2010)。攻撃性は他者に危害を加える行動であり、多くの反社会的行動と強く関連する (Eisenberg et al., 2010)。向社会的行動や攻撃性は対人相互作用のなかで誰しもが選択しうる行動であるが、個人のもつパーソナリティとも密接に関連する。例えば、犯罪と親和性の高いパーソナリティにサイコパシーがあげられる。サ

イコパシーは共感性の欠如、感情の希薄さ、他者を自身の利益のために操作するといった他者操作性の高さ、計画性のなさ、衝動性などによって定義される (Hare et al., 1990)。このような特徴から、サイコパシーは反社会的なパーソナリティとされるが、サイコパシー傾向の高い人は収監者だけでなく一般人口まで連続して分布する (e.g., Edens, Marcus, Lilienfeld, & Poythress, 2006; Walters, Brinkley, Magaletta, & Diamond, 2008)。そのため、幅広い人口において、サイコパシーが攻撃性や暴力の予測要因であることが報告されている (Reidy, Shelley-Tremblay, & Lilienfeld, 2011)。また、サイコパシー傾向の高い人は自身の損失を顧みず他者を援助する利他的行動が低く (White, 2014)、社会的葛藤状況において非協力的である

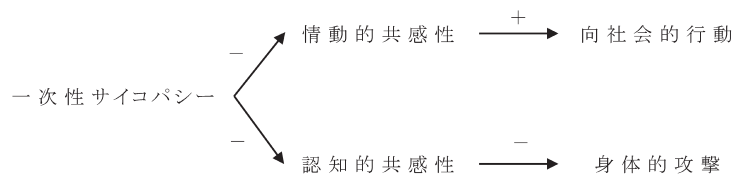
(Rilling et al., 2007)。したがって、サイコパシー傾向の高い人は良好な対人関係を形成することが困難であり、社会不適応的な行動を示すと考えられている。本研究では、サイコパシー傾向の高い人が向社会的行動の低さや攻撃性の高さを示すメカニズムを明らかにすることを目的とする。

サイコパシーは一次性サイコパシーと二次性サイコパシーという二つの次元から構成される。一次性サイコパシーは情動的・対人的問題の特徴とすることに対して、二次性サイコパシーは行動的側面の特徴とする (Hare et al., 1990)。なかでも、共感性の欠如は、一次性サイコパシーの高さに起因する。共感性は他者の情動を知覚、共有、理解する能力であり、対人関係の基盤とされる (Davis, 1983)。他者に対する思いやりは向社会的行動を動機づけ、他者の苦痛や悲しみは攻撃性を抑制させる (e.g., Blair, 2001; Eisenberg et al., 2010)。そのため、従来、共感性は向社会的行動と攻撃性の双方を予測すると考えられてきた (e.g., Eisenberg et al., 2010)。したがって、一次性サイコパシーの高い人は、共感性の低さに媒介され、向社会的行動の高さや攻撃性の低さを示すと考えられる。しかし、多くの研究が理論的示唆にとどまっており、媒介関係を検討した研究はほとんどみられない。そこで、本研究では、サイコパシー、特に、一次性サイコパシーと向社会的行動および攻撃性の関連に対する共感性の媒介効果を検討する。また、近年の研究では、共感性は他者の感情を自身のものとして経験する情動的共感性と、他者の立場にたち、他者の心的状態を理解する認知的共感性にわけられる (e.g., Davis, 1983; Shamay-Tsoory, 2011)。情動的共感性と認知的共感性は相互作用するが、独立して生じうる情報処理過程をもつ (Shamay-Tsoory, 2011)。そのため、情動的共感性と認知的共感性を区別することによって、一次性サイコパシーと向社会的行動や攻撃性との関連がより明瞭になると考えられる。

実際に、向社会的行動や攻撃性との関連も、共

感性の下位次元によってしばしば異なることが報告されている。例えば、情動的共感性は他者の苦痛を低減させたいという願望と密接に関連する、より他者志向的な感情である (e.g., Davis, 1983; Eisenberg et al., 2010)。そのため、向社会的行動を動機づける役割は情動的共感性にあると考えられており、多くの研究で支持する結果が得られている (Eisenberg et al., 2010; Morelli, Rameson, & Lieberman, 2012)。しかし、認知的共感性については、向社会的行動と正の関連を報告する研究も (Fennis, 2011)、関連しないことを報告する研究もある (Belacchi & Farina, 2012; Edele, Dziobek, & Keller, 2013)。一方で、認知的共感性のほうが情動的共感性よりも攻撃性を抑制することが示されている。認知的共感性では、他者の立場にたつて他者を理解することが求められるため、高次な認知機能に支えられる (Richardson, Hammock, Smith, Gardner, & Signo, 1994; Shamay-Tsoory, 2011)。このような高次な認知機能は攻撃性を抑制する働きをもつと考えられている (Richardson et al., 1994)。特に、Jolliffe & Farrington (2004)では、情動的共感性、認知的共感性、犯罪の関連をメタ分析している。その結果、認知的共感性のほうが情動的共感性よりも犯罪との負の関連が強かった。一方で、Lovett & Sheffield (2007)によるメタ分析の結果では、情動的共感性と攻撃性や非行との関連は一貫しないことが報告されている。このような先行研究の知見から、情動的共感性が向社会的行動を促進し、認知的共感性が攻撃性を抑制すると考えられる。

先述したように、共感性は向社会的行動と攻撃性の双方を予測する要因である。さらに、その関係性は共感性の下位次元によって異なり、情動的共感性が向社会的行動を促進し、認知的共感性が攻撃性を抑制する。したがって、一次性サイコパシーの高い人は情動的共感性が低いため、向社会的行動の低さを示し、認知的共感性が低いため、攻撃性が高いと考えられる。特に、White (2014)



注. 図中に記載した+-の記号は正負の関連を表す。

Figure 1 本研究で予想されるモデル

はサイコパシー傾向の高い人は共感性の低さに媒介されて向社会的行動の低さを示すことを明らかにしている。しかし、この研究では、媒介効果は共感性の総合得点のみで検討されているため、情動的共感性と認知的共感性のどちらがサイコパシーの攻撃性の低さを媒介するのか不明確である。攻撃性に関しては、サイコパシーと攻撃性の関連に対する共感性の媒介効果そのものが実証的に検討されていない。

そこで、本研究では、一次性サイコパシーと向社会的行動および攻撃性の関連に対する情動的・認知的共感性の媒介効果を検討することを目的とする。一次性サイコパシーは希薄な感情や冷酷さなど情動的な問題に特徴づけられる (Hare et al., 1990)。しかし、自身の感情である情動的共感性の問題だけではなく、他者を理解するといった、より認知的な共感性の側面にも問題を抱えることの双方が、一次性サイコパシーの高い人の不適応的な社会的行動につながると考えられる。さらに、共感性の下位次元による特異的な関連を明らかにすることで、サイコパシーに対する介入研究へと拡張できる可能性も期待できる。仮説として、まず、一次性サイコパシーは情動的共感性の低さに媒介されて向社会的行動の低さを示すと予想される。また、非行や暴力といった、より反社会的で問題視される攻撃性の側面をとらえるため、本研究では、攻撃性のなかでも、身体的攻撃を攻撃性の指標として使用した。仮説として、一次性サイコパシーは認知的共感性の低さに媒介されて身体的攻撃の高さを示すと予想される。本研究では、構造方程式モデリングによって、これら

2つの媒介効果が同時に成立するモデルを構築し、モデルの妥当性を検討する (Figure 1)。また、共感性の欠如が一次性サイコパシーの高さに起因することから、本研究で予想される仮説が一次性サイコパシーでのみ成立することも確認する。

方法

調査対象者

広島県の大学生132名 (男性45名, 女性87名) を対象とした。平均年齢は18.91 ($SD=4.18$) 歳であった。

手続き

大学の講義中に質問紙を配布し、その場で回答を求めた。調査を開始する前に、口頭および書面で本調査の目的と倫理的配慮について説明を行い、同意した場合のみ回答するように教示した。特に、調査は強制ではなく、回答しなくても不利益はないこと、調査はいつでも中断可能であること、回答内容はすべて統計的に処理されるため個人情報保護されることを強調した。なお、本研究は大学内の研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

調査内容

Levenson Self-Report Psychopathy Scale (LSRP) サイコパシー傾向を測定するために、Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick (1995) によるLSRPの日本語版 (杉浦・佐藤, 2005) を使用した。LSRPは一般人口を対象にサイコパシー傾向を測定する尺度として作成された (Levenson et al., 1995)。Lynam, Whiteside, & Jones (1999) によって十分な信頼性と妥当性、および因子構造の確認

が報告されている。杉浦・佐藤（2005）によってバックトランスレーションののち日本語版が作成され、妥当性が確認されている。情動的・対人的問題の特徴とする一次性サイコパシーと、行動的問題の特徴とする二次性サイコパシーから構成される。一次性サイコパシーが16項目であり、二次性サイコパシーが10項目である。項目例は以下の通りである：“どんなことをやっても、とがめを受けずにすめば、私にとっては正しいことである（一次性サイコパシー）”、“気がつくと、再三再四、同じようなトラブルになってしまう（二次性サイコパシー）”。「1. 非常に当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」までの4件法で回答を求めた。

多次元共感測定尺度 共感性を測定するために、Interpersonal Reactivity Index (IRI; Davis, 1980) の日本語版（桜井, 1988）を使用した。下位因子は共感的配慮、個人的苦悩、視点取得、空想の4つである。共感的配慮と個人的苦悩は情動的共感性に、視点取得と空想は認知的共感性に含まれる。共感的配慮は他者に対して同情や配慮をする程度を測定しており、個人的苦悩は困っている他者に対して動揺する程度を測定している。視点取得は他者の立場に立って物事を考えようとする程度を測定しており、空想は架空の人物に自己を同一視する程度を測定している。IRIは十分な信頼性と妥当性を示すこと、および4因子構造を持つことが確認されている（Davis, 1980, 1983）。桜井（1988）によって邦訳され、妥当性が報告されている。また、因子負荷量の低い項目はみられるが、原版と同様の因子構造であることが確認されている（桜井, 1994）。共感性の定義に関する問題から、先行研究ではしばしば情動的共感性の指標として共感的配慮、認知的共感性の指標として視点取得が使用され、他の2つの下位因子は除外される（e.g., Cox et al., 2012; Edele et al., 2013）。そのため、本研究でも同様の下位因子のみを使用した。項目例は以下の通りである：

“困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない（逆転項目、共感的配慮）”、“他の人たちの立場に立って、物事を考えることは困難である（逆転項目、視点取得）”。各7項目で構成され、「1. 非常に当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」までの4件法で回答を求めた。情動的・認知的共感性によるプロセスを検討することを目的とするため、分析では上記の2つの下位因子の得点のみを使用した¹⁾。

向社会的行動尺度 向社会性を測定するために、菊池（1988）による向社会的行動尺度を使用した。この尺度は、援助行動や親切行動といった向社会的行動を、普段どの程度行っているかを測定する尺度である。先行研究をもとに菊池（1988）が作成し、十分な信頼性と妥当性が示されている。1因子構造で、20項目から構成される。項目例は以下の通りである：“列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる”。「1. したことがない」から「5. いつもした」までの5件法で回答が求められた。

Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ) 攻撃性を測定するために、Buss & Perry

- 1) 本研究での共感的配慮の内的整合性は $\alpha=.58$ と低い値であった。そこで、IRIの共感的配慮と視点取得の項目に対して、2因子を仮定した確認的因子分析を実施した。その結果、共感的配慮の因子で因子負荷量が負の項目がみられた（項目内容「もし自分を紹介するとしたら、やさしい人というと思う」）。当該項目を除外した共感的配慮の内的整合性は $\alpha=.61$ であった。高い値ではなかったが、可能な限り原版の因子構造を保つために、共感的配慮の因子として1項目を除外した計6項目で、仮説モデルの検討を補足的に実施した。その結果、項目を除外しない場合と同様の結果が確認されたが、項目を除外した場合の方が若干良好な適合度が得られた（CFI=.98, TLI=.94, RMSEA=.08, 90%CI=.00, .19）。また、一次性サイコパシーと向社会的行動の関連に対する共感的配慮の媒介効果（間接効果： $B=-.26$, $\beta=-.13$, $SE=.04$, 95%CI=-.22, -.06）および一次性サイコパシーと身体的攻撃の関連に対する視点取得の媒介効果（間接効果： $B=.05$, $\beta=.07$, $SE=.03$, 95%CI=.02, .15）の双方がやはり有意であった。

(1992)の日本語版(安藤他, 1999)を使用した。下位因子は身体的攻撃, 短気, 敵意, 言語的攻撃の4つである。この尺度は, 多様な攻撃性を測定するためにBuss & Perry (1992)が作成し, 十分な信頼性と妥当性が示されている。日本語版は安藤他 (1999) がバックトランスレーションののち作成し, 高い信頼性と妥当性, および原版と同様に4つの下位因子から構成されることが報告されている。本研究では, 身体的攻撃の6項目を分析対象とした。項目例は以下の通りである: “どんな場合でも, 暴力に正当な理由があるとは思えない(逆転項目)”。“1. まったくあてはまらない”から“5. 非常によくあてはまる”までの5件法で回答が求められた。

結 果

変数間の関連

サイコパシー, 情動的・認知的共感性, 向社会的行動, 身体的攻撃の尺度の記述統計量をTable 1に, 各変数間の相関係数をTable 2に示した。相関分析の結果, 一次性サイコパシーは向社会的行動と負の相関, 身体的攻撃と正の相関を示した。

Table 1 測定した尺度の記述統計量および信頼性係数

	M	(SD)	Cronbach's α
一次性サイコパシー	31.94	(6.30)	.81
二次性サイコパシー	21.05	(3.87)	.66
情動的共感性	18.67	(2.44)	.58
認知的共感性	19.63	(3.08)	.73
向社会的行動	53.75	(13.13)	.88
身体的攻撃	14.47	(5.53)	.84

また, 一次性サイコパシーは情動的共感性と認知的共感性の双方と負の相関を示した。二次性サイコパシーについても, ほとんどの尺度で一次性サイコパシーと同様の相関が確認されたが, 二次性サイコパシーと向社会的行動の間には, 有意な相関はみられなかった。

共感性の下位次元と向社会的行動の関連については, 情動的共感性と認知的共感性の双方が向社会的行動と正の相関を示した。共感性の下位次元と身体的攻撃の関連についても, 情動的共感性, 認知的共感性ともに, 身体的攻撃と負の相関を示した。

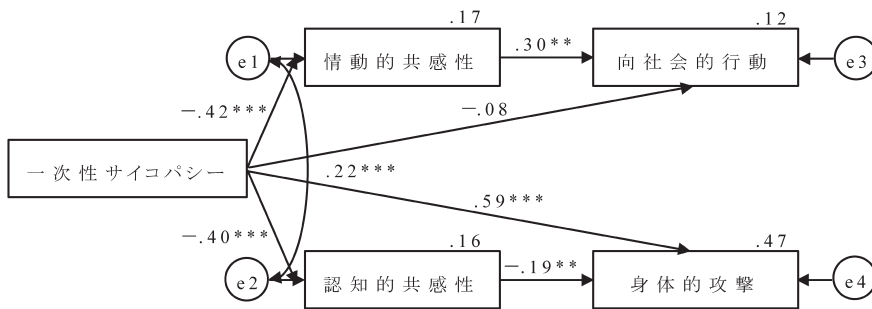
媒介モデルの検討

Figure 1に示した, 一次性サイコパシーと向社会的行動および身体的攻撃の関連に対する情動的・認知的共感性の媒介モデルを検討するために, 最尤推定法を用いて構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling; SEM) を実施した。解析にはIBM AMOS 22を用いた。モデルを構築する際に, 2つの共感性の相関をサイコパシーで完全に説明できるとは考えにくいとため, 情動的共感性と認知的共感性の誤差変数間に共分散を仮定した。間接効果はリサンプリング数を10,000回としたブートストラップ法による信頼区間の推定を行った。SEMを実施した結果, おおむね良好なモデルの適合度が得られた (CFI=.98, TLI=.94, RMSEA=.08, 90%CI=.00, .15; Figure 2)。また, 一次性サイコパシーと向社会的行動の関連に対する情動的共感性の媒介効果 (間接効果: $B=-.24, \beta=-.12, SE=.04, 95\%CI=-.20, -.05$),

Table 2 尺度間の相関係数

	2	3	4	5	6
1 一次性サイコパシー	.47 (.33, .59)	-.42 (-.55, -.27)	-.40 (-.53, -.24)	-.20 (-.36, -.03)	.66 (.57, .75)
2 二次性サイコパシー	—	-.21 (-.37, -.04)	-.34 (-.49, -.18)	-.13 (-.29, .04)	.51 (.37, .63)
3 情動的共感性		—	.35 (.19, .49)	.33 (.17, .48)	-.36 (-.50, -.20)
4 認知的共感性			—	.21 (.04, .37)	-.42 (-.55, -.27)
5 向社会的行動				—	-.29 (-.44, -.12)
6 身体的攻撃					—

Note. 括弧の中は相関係数の95%信頼区間を表示している。



注. 係数はすべて標準化された値を表記している。

** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 2 SEMで検討した仮説モデルの結果

および一次性サイコパシーと身体的攻撃の関連に対する認知的共感性の媒介効果が有意であった（間接効果： $B = .05$, $\beta = .06$, $SE = .04$, $95\%CI = .01, .14$ ）。また、仮説で予想していない情動的共感性から身体的攻撃、認知的共感性から向社会的行動へのパスが引かれるモデルについても検討したが、いずれのパスも有意ではなかった。

加えて、本研究で予想された媒介モデルが一次性サイコパシーでのみ成立することを確認するために、LSRPの一次性サイコパシーと二次性サイコパシー双方の得点を用い、両者に相関を仮定したモデルについても検討した。その結果、二次性サイコパシーから情動的・認知的共感性へのパスはいずれも有意ではなく、身体的攻撃に対する正の関連のみが有意であった。このモデルでも、適合度はおおむね良好であり（ $CFI = .97$, $TLI = .93$, $RMSEA = .08$, $90\%CI = .00, .15$ ），Figure 2のモデルと同様に、一次性サイコパシーと向社会的行動の関連に対する情動的共感性の媒介効果（間接効果： $B = -.26$, $\beta = -.13$, $SE = .04$, $95\%CI = -.22, -.06$ ），および一次性サイコパシーと身体的攻撃の関連に対する認知的共感性の媒介効果は有意であった（間接効果： $B = .05$, $\beta = .06$, $SE = .03$, $95\%CI = .01, .14$ ）。このことから、本研究で検討した媒介モデルは、予想通り、一次性サイコパシーに特有の結果であることが示された。

考 察

サイコパシーは向社会的行動の低さと攻撃性の高さと関連する。一次性サイコパシーは共感性の低さと関連し、共感性は向社会的行動と攻撃性の双方を予測する要因である。共感性は多次元な概念であり、情動的共感性と認知的共感性にわけられるが、先行研究では、サイコパシーにおける共感性の下位次元と向社会的行動、攻撃性の関係性は不明確であった。そこで、本研究の目的は、一次性サイコパシーと向社会的行動および攻撃性（特に、身体的攻撃）の関連を、共感性の異なる側面が媒介することを検討することであった。先行研究をもとに、一次性サイコパシーの高い人は情動的共感性の低さに媒介され、向社会的行動が低いと予想した。同時に、一次性サイコパシーの高い人は認知的共感性の低さに媒介され、身体的攻撃が高いと予想した。仮説モデルを構築し、媒介効果の有意性を検討した結果、十分なモデルの適合度が確認され、予想された2つの媒介効果は双方ともに有意であった。このことから、一次性サイコパシーにおける向社会的行動と身体的攻撃は、異なる共感性の側面に規定されることが示された。

以下では、本研究のモデルから得られた2種類の媒介効果について、順に考察する。まず、一次性サイコパシーの高い人は情動的共感性の低さに媒介されて向社会的行動が低下することが示され

た。これは、一次性サイコパシーは情動的共感性が低いことや、情動的共感性が向社会的行動を促進するといった従来の知見を支持する結果であった。また、White (2014) では、サイコパシーと向社会的行動の関連に対する共感性の媒介効果を検討しているが、共感性を総合得点として扱っていたため、情動的共感性と認知的共感性のどちらが向社会的行動を媒介するのか不明確であった。そのため、共感性を多次元にとらえた本研究の結果は、一次性サイコパシーの高い人で向社会的行動が低下するメカニズムを、より詳細に明らかにしたといえる。一方で、White (2014) では、共感性は多次元的にとらえていないが、複数の向社会的行動を検討できる指標を用いている。その結果、サイコパシーは共感性の低さに媒介されて、匿名で行われる向社会的行動や利他的行動の低さと、自身の利益を期待した向社会的行動の高さの双方を示すことが報告されている。本研究で使用した向社会的行動尺度は「思いやり尺度」や「小さな親切行動尺度」と呼ばれるように、共感性と正の関連を示す。匿名で行われる向社会的行動や利他的行動も共感性と正の関連を示すことから (McGinley & Carlo, 2006)、向社会的行動尺度で測定した概念は、自身の利益を期待した行動というよりは、匿名で行われる向社会的行動や利他的行動と近いと解釈できる。このように、向社会的行動は共感性以外にも様々な動機によって生起しうするため (Eisenberg et al., 2010)、複数の種類にわけられる (McGinley & Carlo, 2006; Murphy, Ackermann, & Handgraaf, 2011)。今後の研究では、具体的な向社会的行動を多次元に測定することで、サイコパシーにおける向社会的行動のメカニズムをより明確にすることができるだろう。

同時に、一次性サイコパシーの高い人は認知的共感性の低さに媒介されて身体的攻撃が高いことが示された。この結果は、先行研究でなされている理論的示唆に整合する。例えば、サイコパシーの攻撃性を抑制するメカニズムは Violence

Inhibition Mechanism (VIM) モデルを用いて説明できると考えられている (Blair, 2001)。VIM は社会的動物における攻撃性を制御するメカニズムであり、人間では、他者の悲しみの表情などが共通の要因であると考えられている。つまり、一般的に、他者の苦痛や悲しみが引き金となって道徳的逸脱が判断される結果、攻撃性が抑制される。しかし、サイコパシー傾向の高い人では、他者の苦痛や悲しみに対する反応が低いため、つまり、共感性が低いため、VIM が適切に働かないと考えられる (Blair, 2001)。しかし、VIM の観点からサイコパシーの攻撃性を説明した理論に基づくと、サイコパシーの攻撃性を抑制する要因は、他者の苦痛や悲しみに対する、より自動的な情動反応であると考えられる (Blair, 2001)。しかし、高次な認知機能に支えられる認知的共感性が攻撃性を抑制することは従来の研究でも指摘されている (Richardson et al., 1994)。本研究でも、情動的共感性ではなく、認知的共感性で一次性サイコパシーと攻撃性の関連に対する媒介効果が成立した。したがって、一次性サイコパシーの攻撃性に直接作用する要因は、他者の苦痛や悲しみを体験して他者を思いやるという情動的共感性よりも、他者の立場にたって他者の苦痛や悲しみを理解するという認知的共感性であることが示唆された。また、本研究で確認された一次性サイコパシーと身体的攻撃の関連に対する認知的共感性の媒介効果は、部分媒介にとどまっていた。これは、一次性サイコパシーと身体的攻撃の関係性がそもそも強いことを示している。しかし、一次性サイコパシーの高い人の攻撃性が、部分的でも認知的共感性によって抑制されることを示した本研究の知見は、先行研究の理論的示唆を裏づける実証的な研究といえるだろう。

本研究では、予想された媒介効果が一次性サイコパシーと二次性サイコパシーのどちらで成立するかについても、探索的に検討した。一次性サイコパシーの影響を統制すると、二次性サイコパ

シーからは身体的攻撃のみに有意なパスが得られたことから、本研究で検討した2つの媒介効果は一次性サイコパシーに特有の結果であると判断された。先行研究でも、一次性サイコパシーは情動的・認知的共感性の低さと関連するが、二次性サイコパシーと情動的共感性の関係性については弱い負の関連や無関連である (Glenn, Iyer, Graham, Koleva, & Haidt, 2009; Reniers, Corcoran, Drake, Shryan, & Völlm, 2011)。これは、一次性サイコパシーが対人的・情動的側面の問題に特徴づけられるのに対し、二次性サイコパシーが行動的問題に特徴づけられることにも整合する。また、本研究では、二次性サイコパシーも一次性サイコパシーと同様に認知的共感性および身体的攻撃と有意な正の相関関係を示したが、媒介効果は得られなかった。そのため、一次性サイコパシーと二次性サイコパシーでは身体的攻撃の媒介要因が異なる可能性がある。例えば、一次性サイコパシーは目的達成の手段として道具的に攻撃性を用いる能動的攻撃性が高く、二次性サイコパシーは嫌悪刺激に対する反応として攻撃性が喚起される反応的攻撃性が高い (e.g., Reidy et al., 2011; Cima & Raine, 2009)。このような二次性サイコパシーの攻撃性の特徴は、二次性サイコパシーが衝動性の高さや行動抑制の困難さと関連することに由来していると考えられる (e.g., Hare et al., 1990; Ross, Benning, & Adams, 2007)。したがって、本研究で示されたように、二次性サイコパシーにおける攻撃性の高さは、共感性では説明できないと考えられる。また、本研究では、サイコパシーが暴力行為と関連し、非行や犯罪の予測要因であるとされることから (Neumann & Hare, 2008; Walsh, Swogger, & Kosson, 2004)、BAQの下位因子である身体的攻撃を分析に用いた。しかし、能動的攻撃性と反応的攻撃性といった異なる観点からも検討を行うことで、サイコパシーにおける攻撃性の生起過程に関する理論をより精緻化できると期待される。一方で、LSRPでは、英語版、日本語版

ともに二次性サイコパシーの内的整合性が低いいため (Levenson et al., 1995; Sugiura & Sugiura, 2011)、結果が適切に検出されなかった可能性も否定できない。したがって、一次性サイコパシーと二次性サイコパシーで攻撃性を支えるメカニズムが異なる可能性も考慮に入れ、本研究で得られた結果を追試する必要があるだろう。

限界と展望

最後に、先述した以外の観点からも、本研究にはいくつかの重要な限界点があった。まず、調査対象者が大学生のみであり、サンプルサイズも小さかった。サイコパシーは一般人口まで連続して分布するパーソナリティだと考えられているが、収監者を対象とした研究も多い。しかし、大学生を対象とした本研究でも、収監者を対象とした研究で示唆されるように (e.g., Blair, 2001)、共感性の低さが一次性サイコパシーの向社会的行動の低さや身体的攻撃の高さを媒介することを示した。今後は、サンプルサイズを拡大したコミュニティ調査などを実施することで、結果の一般化可能性を高める必要がある。

次に、用いた尺度の信頼性に関する問題が挙げられる。本研究で使用した多次元共感測定尺度は、日本語版の作成過程でバックトランスレーションがされておらず、信頼性に関する検討も不十分であった (桜井, 1994)。また、多次元共感測定尺度の因子構造を検討した研究でも、複数の項目で因子負荷量が十分ではないことを報告している (桜井, 1994; 河野・岡本・近藤, 2013)。そのため、日本語版の多次元共感測定尺度では、原版の尺度の概念を十分に測定しきれていない可能性が否定できない。また、原版を作成した Davis (1983) では、情動的共感性を他者に対する感情的反応と定義している。そのため、多次元共感測定尺度では、共感性和同情を区別できないことが指摘されている (Eisenberg et al., 2010)。また、情動的共感性は、他者と同じ情動の共有といった、より狭義にとらえられることもある。以

上のことを踏まえると、今後の研究では、信頼性の高い指標を用いてさらなる知見の積み重ねが必要であると同時に、共感性の定義の差異がサイコパシーや向社会的行動との関連に及ぼす影響も検討することが望ましいだろう。

さらに、本研究はすべての調査材料を一時点で測定し、変数間の関係性を検討する横断調査にとどまった。本研究では、共感性が向社会的行動や攻撃性を予測する要因という立場に基づいて仮説を構築したが、先行研究では、共感性と攻撃性の相互作用関係も示唆されている (Kimonis, Frick, Munoz, & Aucoin, 2008)。そのため、因果関係まで検討できる縦断的研究法や、共感性と攻撃性の相互作用関係を想定した複雑なモデルの検討が必要となるだろう。

上述したように、測定指標や手続きに制約はあったものの、本研究では、一次性サイコパシーと向社会的行動および身体的攻撃の関連は、共感性の下位次元によって異なる生起過程をもつ可能性が示された。従来、サイコパシーにおける情動的・認知的共感性、向社会的行動、攻撃性の関係性は理論的示唆にとどまっていた。これらの関係性を包括的な媒介モデルによって表した本研究の結果は、先行研究の知見を統合することにつながると期待される。

引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討. *心理学研究*, 70, 384-392.
- Belacchi, C., & Farina, E. (2012). Feeling and thinking of others: Affective and cognitive empathy and emotion comprehension in prosocial/hostile preschoolers. *Aggressive Behavior*, 38, 150-165.
- Blair, R. J. R. (2001). Neurocognitive models of aggression, the antisocial personality disorders, and psychopathy. *Journal of Neurology, Neurosurgery & Psychiatry*, 71, 727-731.
- Blair, R. J. R. (2005). Responding to the emotions of others: Dissociating forms of empathy through the study of typical and psychiatric populations. *Consciousness and Cognition*, 14, 698-718.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.
- Cima, M., & Raine, A. (2009). Distinct characteristics of psychopathy related to different subtypes of aggression. *Personality and Individual Differences*, 47, 835-840.
- Cox, C. L., Uddin, L. Q., Di Martino, A., Castellanos, F. X., Milham, M. P., & Kelly, C. (2012). The balance between feeling and knowing: Affective and cognitive empathy are reflected in the brain's intrinsic functional dynamics. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 7, 727-737.
- Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Edele, A., Dziobek, I., & Keller, M. (2013). Explaining altruistic sharing in the dictator game: The role of affective empathy, cognitive empathy, and justice sensitivity. *Learning and Individual Differences*, 24, 96-102.
- Edens, J. F., Marcus, D. K., Lilienfeld, S. O., Poythress, N. G. (2006). Psychopathic, not psychopath: Taxometric evidence for the dimensional structure of psychopathy. *Journal of Abnormal Psychology*, 115, 131-144.
- Eisenberg, N., Eggum, N. D., & Di Giunta, L. (2010). Empathy-related responding: Associations with prosocial behavior, aggression, and intergroup relations. *Social Issues and Policy Review*, 4, 143-180.
- Fennis, B. M. (2011). Can't get over me: Ego depletion attenuates prosocial effects of perspective taking. *European Journal of Social Psychology*, 41, 580-585.
- Glenn, A. L., Iyer, R., Graham, J., Koleva, S., & Haidt, J. (2009). Are all types of morality compromised in psychopathy? *Journal of Personality Disorders*, 23, 384-398.
- Hare, R. D., Harpur, T. J., Hakstian, A. R., Forth, A. E., Hart, S. D., & Newman, J. P. (1990). The Revised

- Psychopathy Checklist: Reliability and factor structure. *Psychological Assessment: A Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 2, 338–341.
- Jolliffe, D., & Farrington, D. P. (2004). Empathy and offending: A systematic review and meta-analysis. *Aggression and Violent Behavior*, 9, 441–476.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル—— 川島書店
- Kimonis, E. R., Frick, P. J., Munoz, L. C., & Aucoin, K. J. (2008). Callous-unemotional traits and the emotional processing of distress cues in detained boys: Testing the moderating role of aggression, exposure to community violence, and histories of abuse. *Development and Psychopathology*, 20, 569–589.
- 河野莊子・岡本英生・近藤淳哉 (2013). 青年犯罪者の共感性の特性 青年心理学研究, 25, 1–11.
- Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing psychopathic attributes in a noninstitutionalized population. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 151–158.
- Lovett, B. J., & Sheffield, R. A. (2007). Affective empathy deficits in aggressive children and adolescents: A critical review. *Clinical Psychology Review*, 27, 1–13.
- Lynam, D. R., Whiteside, S., & Jones, S. (1999). Self-reported psychopathy: A validation study. *Journal of Personality Assessment*, 73, 110–132.
- McGinley, M., & Carlo, G. (2006). Two sides of the same coin? The relations between prosocial and physically aggressive behaviors. *Journal of Youth and Adolescence*, 36, 337–349.
- Morelli, S. A., Rameson, L. T., & Lieberman, M. D. (2012). The neural components of empathy: Predicting daily prosocial behavior. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 9, 39–47.
- Murphy, R. O., Ackermann, K. A., & Handgraaf, M. J. J. (2011). Measuring social value orientation. *Judgment and Decision Making*, 6, 771–781.
- Neumann, C. S., & Hare, R. D. (2008). Psychopathic traits in a large community sample: Links to violence, alcohol use, and intelligence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 76, 893–899.
- Reidy, D. E., Shelley-Tremblay, J. F., & Lilienfeld, S. O. (2011). Psychopathy, reactive aggression, and precarious proclamations: A review of behavioral, cognitive, and biological research. *Aggression and Violent Behavior*, 16, 512–524.
- Reniers, R. L. E. P., Corcoran, R., Drake, R., Shryane, N. M., & Völlm, B. A. (2011). The QCAE: A questionnaire of cognitive and affective empathy. *Journal of Personality Assessment*, 93, 84–95.
- Richardson, D. R., Hammock, G. S., Smith, S. M., Gardner, W., & Signo, M. (1994). Empathy as a cognitive inhibitor of interpersonal aggression. *Aggressive Behavior*, 20, 275–289.
- Rilling, J. K., Glenn, A. L., Jairam, M. R., Pagnoni, G., Goldsmith, D. R., Elfenbein, H. A., & Lilienfeld, S. O. (2007). Neural correlates of social cooperation and non-cooperation as a function of psychopathy. *Biological Psychiatry*, 61, 1260–1271.
- Ross, S. R., Benning, S. D., & Adams, Z. (2007). Symptoms of executive dysfunction are endemic to secondary psychopathy: An examination in criminal offenders and noninstitutionalized young adults. *Journal of Personality Disorders*, 21, 384–399.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係——多次元共感測定尺度を用いて—— 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学), 37, 149–154.
- 桜井茂男 (1994). 多次元共感測定尺度の構造と性格特性との関係 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学), 30, 125–132.
- Shamay-Tsoory, S. G. (2011). The neural bases for empathy. *The Neuroscientist*, 17, 18–24.
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005). 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性 日本心理学会第69回大会発表論文集, 407.
- Sugiura, Y., & Sugiura, T. (2011). Psychopathy and looming cognitive style: Moderation by attentional control. *Personality and Individual Differences*, 52, 317–322.
- Walsh, Z., Swogger, M. T., & Kosson, D. S. (2004). Psychopathy, IQ, and violence in European American and African American county jail inmates. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 72, 1165–1169.
- Walters, G. D., Brinkley, C. A., Magaletta, P. R., & Diamond, P. M. (2008). Taxometric analysis of the Levenson Self-Report Psychopathy Scale. *Journal of Personality Assessment*, 90, 491–498.
- White, B. A. (2014). Who cares when nobody is watching? Psychopathic traits and empathy in prosocial behaviors. *Personality and Individual Differences*, 56, 116–121.

Prosocial Behavior and Physical Aggression in Psychopathy: Mediating Effect of Affective and Cognitive Empathy

Ayame TAMURA^{1,2} and Yoshinori SUGIURA¹

¹Hiroshima University

²Japan Society for the Promotion of Science

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2017, Vol. 26 No. 1, 38–48

Psychopathy is related to low prosocial behavior and high aggression. The lack of empathy is one of the main features of primary psychopathy. It has been robustly indicated that empathy predicts both prosocial behavior and aggression. Empathy is composed of affective empathy and cognitive empathy. However, no studies examined that the affective and cognitive empathy as potential mediators of the relationship between psychopathy and prosocial behavior, and between psychopathy and aggression. This study investigated this mediating model. 132 undergraduate students completed the questionnaires measuring psychopathy, multidimensional empathy, prosocial behavior and aggression. Results showed that primary psychopathy was negatively associated with prosocial behavior, and this relation was mediated by affective empathy, while primary psychopathy was positively associated with physical aggression, and cognitive empathy mediated the relationship between them. This finding will offer the theoretical and practical implications by postulating different mediating process of prosocial and antisocial behavior in psychopathy.

Key words: psychopathy, affective empathy, cognitive empathy, prosocial behavior, aggression